

天童荒太

Tendo Arata

孤独の歌声

新潮文庫

こ 独 の うた 声
孤 独 の 歌 声

新潮文庫

て - 2 - 1



平成九年三月一日発行
平成十一年八月十日刷

著 者 天 童 荒 太

発 行 者 佐 藤 隆 信

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便番号 一六二一八七一

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三)三二六六五四四〇

電話 読者係(〇三)三二六六五一一一

振 替 〇〇一四〇一五八〇八
価格はカバーに表示してあります。

丁・落し本は、ご面倒ですが小社読者係宛へ送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Arata Tendô 1994 Printed in Japan

新 潮 文 庫

孤 独 の 歌 声

天 童 荒 太 著

新 潮 社 版

5841

孤
独
の
歌
声

1

君はひとりだ。

まわりにどれだけ人がいても、君はずっとひとりだった。

君も本当は知っていた。

本心を隠し、明るくふるまい、ひとりでないふりをしてきたけれど。

でも、もうぼくがいる。

ぼくならわかつてあげられる。

君はもうひとりじゃない。

だから、君にもぼくをわかつてほしい。

ぼくたちは、もうひとりぼっちじゃない。

さあ、ぼくのこと、わかってくれた？

ぼくを理解してくれた？

本当に？ 本当に？ 本当に？

じゃあ試そう、試してみよう。

君は、本当に、ぼくを理解してくれたのか、ぼくをわかってくれたのか。

ぼくたちは、本当にもうひとりぼっちじゃないのか、どうか。

さあ、さあ、よく見て。ぼくを見て。

ぼくは、次に、どこを刺すと思う？

「一〇月一三日。午後九時二五分。北野町、野猿街道を第六小学校に向かう道。詞のフレーズが浮かぶ」

そこまで吹き込んだとき、いきなり冷たい風が頬を打った。

ボタンを押し、風をやりすごした。

秋の長雨がつづいていた。それが、ようやく晴れて、珍しく秋晴れの日、夏が戻ってきたかと思わせるほど暖かな陽気だった。だが、日が落ちて夜を迎えたたん、急に冷え込み、つい気を許してスニーカーにGパン、Tシャツにサマージャケットという薄着で出てきたおれの肌をふるわせた。

いや、冷え込み、ふるえは、おれの内側のものかもしれない。

おれは、風がすぎたのを見はからい、ふたたび録音ボタンを押した。

「タイトル未定。……わからない人、おまえは別れを切り出した、きまり文句で吹き出した、もしもおまえに、おれのこと、わかるなんて言われたら……言われたら……」

おれはふと別れたばかりの女を思い出した。二、三度寝ただけの、プライドばかり高い鈍感な女だったから、むしろせいせいしたくらいだが、別れるときの「あなただけのこと」がわから

ない」という言葉が、心にひっかかった。

「もしもおまえに、おれのこと、わかるなんて言われたら……おれはおまえを刺すだろう……ナイフで胸を切り開き、おまえの知ってるこのおれが、どんな顔だか見てみたい……どんな歪んだ顔なのか、どんな醜い恰好か……こんなおれを愛したおまえ、こんなおれに抱かれたおまえ……つらくて憎くて愛しくて、胸の裂けたおまえと夜の果てまで踊りつづけよう……」

そのとき、前方のぼうつとかすんだ闇の奥から、澄んだハイヒールの靴音が聞こえた。おれはテープを止めた。

幅が二メートルもない、大通りから住宅街の奥に入った街灯もまばらな暗い通りだった。おれは、自分のアパートから、ふた駅近い距離があるバイト先まで、嵐か、それに近い大雨でもないかぎり、歩くことにしていた。表通りはなるべく避けて、人通りの少ない裏通りや路地を選ぶ。人や車が多く通っているなかでは、おれの捜し物は見つからない。だったらせつかく歩いていく意味もない。

ハイヒールの音が、確かなリズムを刻んで、ひびく。

この、コツコツと夜の街にひびく音は、妙に胸がときめく、不思議な歌だ。暗い興奮とも呼べるものが、内側に湧いてくる。

この音は、いま人気絶頂のロッカーたちだって、まだ出せちゃいない。ひと昔前の偉大なミュージシャンたちでさえ、数度近づけたにすぎない。

夜の通りにひびくハイヒールの音のなかには、食って寝て愚痴を言って人を責め嘘をつき便秘と生理不順に悩んで……なんて日常の女の姿は、まったくうかがえない。暗く重たい現実を生きている女は消え、イメージとしての女、性のシンボル、個々の理想の女を、聞くものに生み、想像をふくらませていく。

やがてハイヒールの靴音を追いかけ、街灯の光が届くなかに、ほっそりとした影が浮かんだ。

ぴんと背筋を伸ばし、闊達^{かつた}でいて、しとやかさも香る歩き方をする。シンブルで地味なスーツ姿。堅い職場に勤めるOLだろうか、派手なところは少しもなく、極力性的な印象を避けているようにも見える。肩から大型のバッグを提げ、左手に買い物袋を提げている。顔のまだ見えないその影に、新たにイメージがふくらんでゆく。

どんな女が、この時間、おれとふたりきりの空間に存在するのか……どれほど神秘的な異性、あこがれの肉体が、おれの前にあらわれたのか……ほとんどの場合、次には苦い失望を味わわれる。

女の顔が見えた。現実はいつだって残酷だが、彼女は悪くなかった。

年の頃は二十五、六。髪は短くカットし、眉^{まゆ}が濃く、瞳^{ひとみ}も大きく、まなじりまでくつきりとして、曖昧^{あいまい}な感じがない。

やや異様な印象を受けるのは、唇^{くちびる}をひきしめ、強張^{こわば}った視線を歩いていく数メートル先に向け、じっと何かを見据^{みす}えているようだからだろう。おれにはまったく注意もくれず、おか

げで彼女をじつくり眺められたが、思いつめた表情に魅かれた。

それとはべつに、彼女の手に掲げている袋が、コンビニエンス・ストアのものであることもまた、おれを刺激した。彼女がひとり暮らしの可能性が大きいことになる……。

彼女とすれ違い、しばらくして、からだの向きを変えた。

彼女を尾けながら、おれは、自分の求める音が、内側に生まれてくるのを感じた。彼女の靴音がリズムボックスになり、線の美しいうしろ姿に、想像をかきたてられ、混沌とした音の渦のなかから、メロディが浮かび上がってくる。

やがて彼女は、住宅街を北に貫く暗い通り沿いの、小綺麗なマンションに入っていった。

大きさから見て、六畳程度のワンルームだろう。それぞれの部屋に小さなバルコニーがあり、空調は備えつけらしく同じ室外機が並んでいる。おれは、マンションの前で、マイクロナセット・レコーダーを口もとに上げ、ポケットから腕には巻かない時計を出して確かめると、

「九時三四分、曲のイメージ。子安町二丁目……」

マンションの門に掲げられた表札の住所を読み、つづけて、ハミングで曲の旋律を吹き込みはじめた。

そのとき、三階の一室のあかりが灯った。

無意識のうちに鍵を開けていた。ハイヒールを脱いで部屋に上がると、電気をつけた。少し前、ニューヨークのキャリア・ウーマンはスニーカーで通勤し、会社のなかでハイヒールにはきかえると言われ、丸の内あたりでも流行ったらしいが、わたしは逆だった。職場への行き帰りにハイヒールをはき、職場で動きやすい靴にはきかえる。

コンビニの買い物袋を、キッチンに落とすように置くと、六畳の部屋に入りながら、シヨルダー・バッグも力が抜けるままに下ろした。スーツが皺になることも考えず、ベッドに倒れこんだ。

今回の事件のせいで、ずっと忘れていた……いや、忘れられるはずもないが、しばし意識の深いところに押し込めておけた声が、聞こえはじめていた。

ねえ、わたしを捜して……早く、わたしを捜して……。

わかつてるわ、とわたしは答える。

わかつてるの、やってるわ、本当よ、捜してるのよ、一生懸命。

でもまだわたしは戻ってないわ。と、頭のなかの声は、悲しげに抗議する。

わたしはまだ、あの夜のなかをさまよったままよ、あなたに見放されたときのまま……。

見放してなんかいいわ。

わたしは、うしろめたさを感じながら、強い調子で言う。

全然見放していないわ、搜したのよ、いいえ、いまでも搜しているのよ、あなたを搜しつづける……。

叫びだしたくなって、ベッドから起き上がった。顔のすぐ前に光る目があった。脈がいったん止まった感覚、次にはどつと激しく打ちはじめ。

「ああ……ニキチ……おどかさないでよ」

ベッドと同じ高さのガラス製のテーブルの上に、いつのまにか白地に茶のシマが入った猫が座り、わたしを見つめていた。

「おまえ、どっから入ったの」

隣の部屋の女子大生が飼っている猫だった。ペットは飼えないマンションだから、ふだんは外に出されている。もともと野良で、マンションの周辺をうろついていたところを、隣の娘が餌をやるうちになつき、彼女が部屋にいるあいだは、こっそりなかに上げているようだった。わたしも、猫は嫌いではないので、誰にも黙っていた。全部で十八室の小さいマンションのため、管理人はおかれず、歩いて十分のところにある不動産会社が管理していた。

隣室の娘は、四年制の大学に通っているから確かに女子大生にちがいないが、むしろ夕方からのクラブでのバイトに皆勤賞の様子だった。この時間、ニキチは外に閉め出しをくつているはずだが、

「まさか、窓が開いていた？」

わたしは確かめに立った。開いていない。窓ごしに下を見ると、マンションの玄関前に若い男が立っていた。右手を口もとにやり、何やら話している様子だ。どこか普通でない。冷え込んできた秋の夜に、Tシャツとサマージャケット……。ふと、先に道ですれちがった気がした。別のことを考えていたから、確かとは言えないが……。もしかしたら尾けてきたのだろうか……。だとしたら、電気を不用意につけてしまった。

ひとり暮らしの女性の注意、その一。〈夜遅く帰ってきたときは、すぐに部屋の電気はつけないようにしましょう、変質者に部屋を教えてしまいます〉

若い男がこちらを見上げた。わたしはカーテンの陰に隠れた。三階だから顔だちまではわからないが、年の頃は十八、九。彼は、からだの向きを変えて歩きだし、すぐに視界から消えた。

そのとき、背後でコトリと音がした。

訓練された動きをとることなどでせず、本能のまま振り返ると、

「やだ……」

玄関のドアがほんの少しだが開いていた。ぼんやりしたまま、ドアに鍵をかけるどころか、きちんと閉めることもしなかったらしい。

ベッドに倒れこんでから、どのくらい時間が経っただろう。三畳あるキッチンには、玄関に向かつて左に折れる形になっているから、いまいる部屋の中央から玄関は見通せても、キッ

チンの奥までは目がとどかない。トイレとユニットバスは、玄関に向かって右側にある。そのドアも完全には閉まっていけない。今朝は少し寝すごしたため、髪を軽くブラッシングしただけで、飛び出した。そのとき、ドアをきちんと閉めたかどうか、おぼえていない。

物音は、ドアが風に揺れたのか。最も可能性が高いのは、気のせいだということ。だが確かに音はしたと、わたしの勘が訴える。

すぐには玄関に近づかなかった。職業柄もある。だが女ひとりで暮らすということとは、こういうことだと思っている。思わされてきたと言ってもいい。

わたしは、バッグを捜し、キッチンと部屋のあいだに落ちているのを見て、心のうちで舌打ちをした。幸い、肩紐は部屋のほうに伸びている。静かに腰を屈めて、足を伸ばし、指先にバッグの肩紐をひっかけようとした。ストッキングですべて、うまくいかない。なんて恰好……誰もいなかったら、ピエロだ。

いいえ、ちがう。誰もいなかったら、それにこしたことはない。警察学校のベテラン教官に何度もそのことで怒られた。若い者は、誰も見てないところでも無駄に見栄をはるようだが、その見栄のために何人も命を落としているんだ……。

ようやく肩紐を引き寄せることができた。いきなり、ふくらはぎに柔らかくて温かい何かがあふれた。見下ろして、溜息をついた。

びっくりさせないでよ、ニキチ……。

テーブルから下りた猫が、わたしを見上げていた。

わたしは、注意をおこたらないまま、引き寄せたバッグのファスナーを開いた。書類が束になって詰まっている。

わたしが実際に捜査にあたっている事件の資料コピー。コンビニエンス・ストアの連続強盗事件。八王子署の管轄内^{かんかつ}で二度つづけて起きている。隣の管轄でも一件、ビデオで録った強盗犯の姿と目撃者の話から同一犯の可能性があった。

フルフェイスのオートバイ・ヘルメットをかぶり、大型のサバイバル・ナイフをつきつけ、「マネー、マネー」とつたない発音でおどす。ときに「ノー・マネー、キル・ユー」とつけ足し、レジを開けさせ、金をわしづかみにして逃走する。外国の、貧しい国からの出稼^{でかせ}ぎ労働者の線が強いという見方もある。わたしは盗犯係^{とうはんけい}ながら、強行犯係^{きやうかうはんけい}の捜査に加えられた。大学時代、アセアン同好会というボランティア活動を主としたサークルに入って、わずかだがタイ語とマレー語、挨拶^{あいさつ}の言葉だけならタガログ語も話せたからだ。いま強行犯係が殺人の本部事件にあたっていて、手が回らないことも理由のひとつであり、盗犯係の数人がコンビニエンスの捜査に加わっていた。

その本部事件の資料コピーも、バッグには入っていた。

こちらは担当ではないから、同じ署とはいえ、本当に大切な部分は教えてもらえていない。何度も頼んでようやく一部を渡してもらえた。

「とりあえずおおまかな資料だ。とりあえず新人の君の、今後の捜査の仕方を学んでいくときの参考と思ってほしい」